

草の芽句会だより

NO,124  
18,11、1

葭簾より友の声する菊花展  
句友らし桜もみじに一人坐す  
範子

城壁の崩れ無残や城の秋  
夫々の菊に賞ある菊花展  
節子

石垣の崩落むざん秋深む  
外国人案内されてる菊花展  
貞子

紅葉して祭りのあとの置神輿  
秋深しこの歳月の慎ましく  
文子

うす紅の小さき花びら冬桜  
朝の卓湯気たちのぼる今年米  
純子

猫じゃらしかすかに揺るゝ城の濠  
走り根に野菊一輪城の濠  
禮子

行くところ赤のまま咲く田んぼ道  
赤のまま咲く道が好き散歩道  
貞

お札所の遠く灯れる夜寒かな  
遍路道すすきの長けて揺れどおし  
剋子

出席者 吉崎 氏家 川原 大黒 森 馬場  
投句者 真鍋 小山

病とは突然にやって来るものと実感。いつまでも自分はそれなりに元気で、そこそこ頑張っている。と自負していたが、情けない三ヶ月でした。

久しぶりに丸亀城に吟行。大手門には幔幕が掛かり菊花展が開かれていた。近年出展者が少なくなり少し寂しい気もしたが、丹精の菊に一巡。そして、いつものごとく飯野山の見える城濠のベンチに座り、静かに秋の声を探すことに。桜はうすく紅葉し紅葉狩には少し早かったかも。天守に上った句友によれば十月桜が満開だったとか。

十二月は納句会、楽しみである。

(馬場 記)

